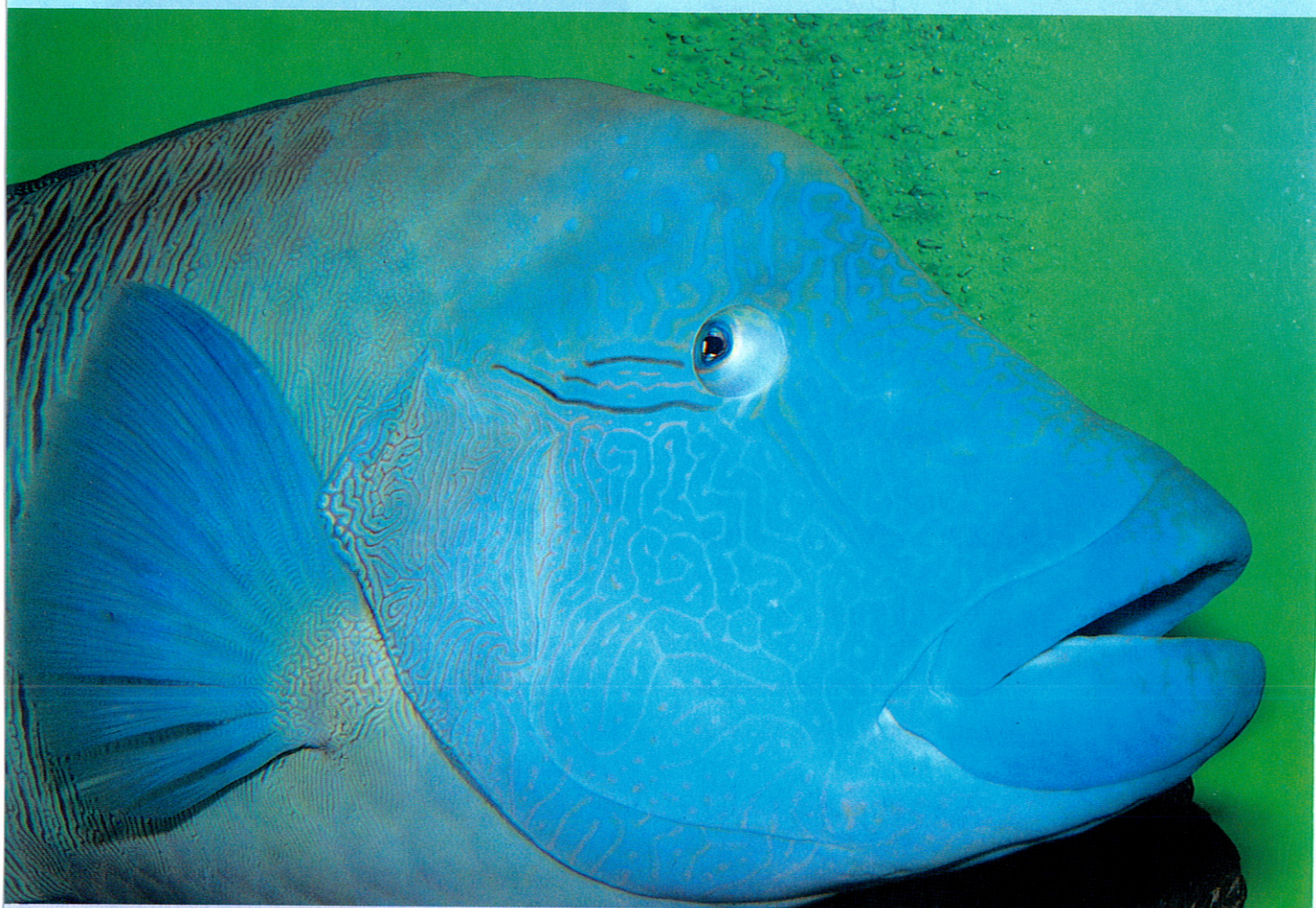


海・川・湖その世界とのふれあい

マリンズノー

MARINE SNOW

No. **13**
1991. 3. 31



● 目次

『長い旅』	トピックス…………… 4
—イルカの搬入24時間—… 1	催し物…………… 5
深海性魚類の飼育II	浅虫の海の生物たち(13)…… 6
～サケビクニソ・ザラビクニソ～… 3	浅虫水族館日誌抄録…………… 6
	動物紳士録…………… 7

青森県営浅虫水族館

『長い旅』

—イルカ搬入24時間—

田村 徹

1990年11月8日、和歌山県東牟婁郡太地町。10月3日に捕獲され、約1ヶ月の畜養を終えた2頭のバンドウイルカを青森へ輸送する朝がやってきた。

太地から青森まで約1,400km、時間にして24時間、長い一日が始まる。



11月8日

AM 8:00 太地漁港内の生簀イッスから、イルカ達が運ばれる。

AM 8:30 イルカをタンカに納め、クレーンで輸送用トラックへ。

AM 9:00 露出した部分にチンク油を塗布し、シャワーリングをセットする。抗生剤、副腎皮質ホルモンを筋注。

コンテナ内の水温を測ると19℃近くまで上昇している。イルカの体に直接触れないように注意しながら氷を投入し水温を下げる。心拍、呼吸異常なし。

AM10:00 荷台ホウダイに幌をかけ、作業用ライトを点灯、積み込み作業も無事に終了し、まずは一安心。青森到着は翌日の昼近くになるだろう。覚悟はして来たのだがやはり24時間の搬入作業は大仕事だ。イルカはもちろんだが、搬入スタッフ全員元気で青森まで到着して欲しい。いよいよ出発だ。



AM11:00 太地を出て1時間。イルカ達も落ち着いたようだ。心拍、呼吸問題なし。

AM12:00 ホットしたのも東の間。コンテナの水温がまた上昇、車内の室温も出発時の20℃から27℃まで上がっている。氷を投入30分程で水温18℃まで下がる。

PM 1:00 イルカが尾鰭オビレをばたつかせることが多くなる。やはり水温が高い、心拍、呼吸の様子を見ながら氷投入、水温測定を繰り返す。スタッフは交替で食事をとる。揺れる荷台で立ったままの作業だが、車酔いする者も出ず、今のところ全員元気。

PM 3:00 氷投入を続行。準備した氷で足りるだろうか、車内の温度もあいかわらず高い。汗だくの作業が続く。

PM 6:00 名古屋市内に入る。車内の温度はだいぶ下がってきたが、水温がまだ高い。氷も使い果たし、自然に温度が下がるのを待つしかないようだ。

PM 8:00 静岡IC。2頭共眼を閉じてじっとしている。太地を出てから30分おきに心拍数、呼吸数をチェックしているが、どうやら落ち着いたようだ。

PM10:00 沼津 I C。No.16の心拍が弱い。呼吸数も落ちている。スタッフの顔に緊張が走る。強心剤を筋注。

PM11:00 No.16心拍力強くなる。呼吸数も増え安定してきた。向ヶ丘 I C で休憩、いよいよこれから東京都内に入る。11月12日新天皇即位の礼が行われるため、検問・交通規制が予想され、大幅に時間をとられるかもしれない。出発から12時間を経過して、皆の顔に疲労の色がうかがわれる。なるべく短時間で通過できればいいのだが……。

11月9日

AM 0:00 首都高速を走る。幌のすきまから外をながめると、ネオンがまぶしい。さすがに車の台数も多く高速道路とは思えぬ位ゆっくりした走行が続く。まだ検問らしいものにも遭遇せず、スムーズに東北自動車道へ入れそうだ。

AM 0:30 浦和 I C へ。都内でのロスタイムを覚悟してただけに、予想以上に早く到着したことで元気がでる。『よし！中間点を通過』

AM 1:00 羽生 S A。高速走行に入ったためだろうか、No.16、17共に落ち着かない、頭部を激しく左右に振り呼吸も荒くなる。鰭がどこかに当たっていないか確認、体の位置を整えてやる。日中に比べだいぶ室温、水温共に下がってきている。

AM 3:00 深夜になり単調な時間が過ぎる。車内にはタイヤとシャワーリングの音だけが響く。スタッフの間の会話もとだえた。時々、シャワーがいき届かない部分にひしゃくで水をかけてやり、心拍数、呼吸数を数える。まるで時間が止まってしまった様な錯覚に陥る。荷台後方に設置した休憩場所に交替で体を横にするが熟睡できない。今どの辺を走っているのだろうか？時計の針が進まない……。水温を測ると16℃近くまで下がり、イルカ達の心拍も弱い。温湯を補給して水温を上げられれば良いのだが、夜中の3時過ぎでは……。運転席と連絡を取り、サービスエリア・パーキングエリア・ガソリンスタンドなど開いていそうな場所を探す。

AM 4:00 国見 S A。食堂に灯が見える、事情を話し温湯を分けてもらう。全員でバケツリレーし、コンテナに給湯、水温上昇17.5℃まで復帰。

AM 5:00 水温が再び低下。室温も10℃まで下がった。残りの温湯を足し、シャワーリングを止め、ひしゃくによる作業に変える。

AM 6:00 水温また低下。もう温湯は使い果たした。イルカの心拍数が極端に減って、力も弱い。2頭に強心剤を筋注する。

スタッフの疲労も限界に近づいているが、祈るような気持ちでイルカ達の側にはりつく。ひしゃくで水をかけながら様子を見る。

AM 7:00 幌のすきまから白い山々が見える。青森では雪が降っているかもしれない。室温10℃、水温16.5℃。

AM 8:00 碓ヶ関 I C。いよいよ青森県内に入った、残り2時間程で浅虫に着く。皆の顔に笑みが蘇る。イルカ達はかなり疲労した様子で、ジッと動かない。今まで経験したことのない重力を体に受け、24時間も経つものだから無理もない。水族館に搬入後無事に泳げるだろうか。心拍、呼吸異常なし。

AM 9:00 青森 I C 着。市街地を走り抜け浅虫に向かう。幌のすきまから見慣れた町並みが見える。もう一息だ。

AM10:00 浅虫水族館着。トレーニングプールへ搬入。



1頭に2人付き添い、自力で泳ぎ始めるのを待つ。時々手を離してみるがなかなか尾鰭が動かない。約30分後、やっと泳ぐ。見守る職員から拍手が起こる。長い旅が終わった。

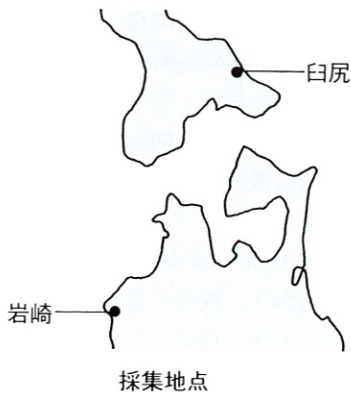
深海性魚類の飼育 II

～サケビクニン・ザラビクニン～

杉本 匡

サケビクニン *Careproctus rastrinus* は、クサウオ科Liparidae、コンニャクウオ属*Careproctus*の魚で、オホーツク海、北海道から東北にかけての太平洋側の水深100～400mの深海に生息する。またザラビクニン *Careproctus trachysoma* もクサウオ科、コンニャクウオ属の魚で、日本海、タートル海峡、オホーツク海の水深200～800mの深海に生息する。両種ともその風采から深海魚というイメージが強く、展示効果も大きい。当館では

1984年よりサケビクニンを、1990年にはザラビクニンを入手し飼育した。採集地点はサケビクニンが北海道臼尻



と岩崎（日本海側で初めての記録）、ザラビクニンが岩崎であり、共にエビ籠漁で混獲されたものである。以下はサケビクニンの飼育等についてのこれまでの経過と現状などについて述べる。

サケビクニンの体はゼラチン様の組織で覆われ、体表皮は薄く非常に傷つきやすい。搬入時に体表に損傷のあるものは、その箇所より傷が拡がり、ゼラチン様の肉が解け、骨が露出しやがて死亡し



サケビクニン



ザラビクニン

てしまう。初期の死亡のほとんどは搬入時の傷の悪化によるものである。

これまでサケビクニンは毎年2～3月に入手し、8～9月頃までしか飼育することができず、通年飼育が課題となっていた。死亡原因と考えられるものに、夏期の高温により冷却が追いつかなくなるための飼育水温の上昇（10℃前後）、同居魚（キチジ・クサウオ等）による給餌時などに見られた誤ったアタックによる傷の悪化、鰓付近に寄生するウオビルによる貧血等^{メラ}があげられる。そこで昨年は冷却を強化し、常に飼育水温を7℃以下に保つ様にし、また、同居魚も取り上げサケビクニンのみの単独飼育（後にザラビクニンを同居）とした。この結果、3月の飼育開始以後、初期に外傷の拡大等により死亡した個体を除くと、9尾中4尾が現在（3月10日現在）まで生残している。なお昨年はウオビルの発生がなかったことも長期飼育成功の一因であると考えられる。

以上の事を要約すると、サケビクニンを長期飼育するためには、1.外傷のない個体の入手、2.水温を7℃以下に保つ、3.同居水族の選択→外傷を与える水族の除去、4.寄生虫の駆除、防除等のことを留意すれば可能であることがわかった。

今後はまだ産卵が見られていないことから、ぜひ繁殖させたいと思っている。

参考文献

木戸 芳（1984）．クサウオ科．日本産魚類大図鑑、益田他編．東海大出版会．解説：332-326．

フンボルトペンギンの産卵

飼育中のフンボルトペンギンが初めて産卵しました。卵の大きさはニワトリの卵よりも、ひと回り大きく、まず1月6日に1個、そして数日後(未確認)にまた1個と合計2個の産卵でした。

当館において飼育を開始してから7年も経過していましたが、これまでは産卵行動が全く見られませんでした。その理由としては、アザラシとの混合飼育である、そして完全に屋内のみでの飼育であったという、この2点が考えられました。そこで、昨年4月に飼育舎を改良し、日中はペンギンたちが自由に外に出て行き、十分な日光浴が出来るように改善しました。

現在、オスとメスの2羽が巣の中で一生懸命に卵を暖めています。しかし、初産ということもあり今回は余り過度の期待は出来ませんが、それでも「もしかすれば……」という淡い希望を抱いています。(神)



ナポレオン フィッシュ公開

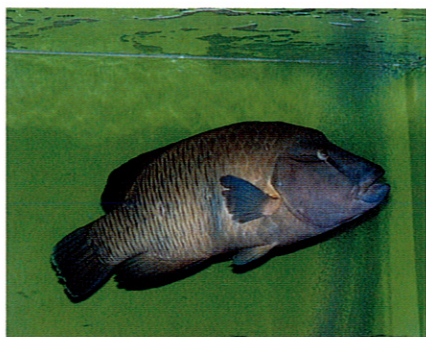
今年の1月1日よりナポレオンフィッシュの展示を開始しました。

ナポレオンフィッシュというのはメガネモチノウオの別名で、分類的にはベラ科に属し、全長2mにも達するベラ類中最大の種です。成長に伴い頭部が著しく突出してこぶ状となり、ナポレオンと呼ばれる由縁となっています。

当館で飼育している個体は全長約90cm程で、宮城県のマリンピア松島水族館のご好意により分けていただいたものです。

最近某家電メーカーのテレビコマーシャルなど

にも出演していたこともあり、人気も上々です。いまのところ頭部のこぶはまだ少



しですが、食欲も旺盛で係員が近づく水面まで上ってきて餌のアジやイカを吸い込むように摂餌しており、早く大きくなってナポレオンと呼ぶにふさわしい容姿になるのを期待しています。(阿部)

仔イルカ“アーサー”の死亡

当館で初めて誕生したバンドウイルカの子供(アーサー)が、1990年9月9日に死亡しました。

1989年7月30日に誕生した仔イルカは、飼育経過も順調で満1才の時「アーサー」と名付けられ、母親のマリンからオッパイをもらったり、飼育係の手から餌をもらったり元気にプールを泳ぎ回っていました。ところが去年の8月末頃からアーサーの行動に変化が見られました。他のイルカと遊ぶことがなくなり、母親と一緒に泳ぎ回ることが多くなりました。それと同時に母親からの授乳は確認されるものの摂餌量が減少しはじめました。9月

5日、授乳及び摂餌もしない為アーサーを取り上げ血液検査を行い、その結果から抗生剤、消炎剤等の筋注及び治療を数日続けましたが、残念ながら9月9日の早朝に死亡しました。

解剖の結果、慢性化膿性肺炎と診断されました。全国の水族館でバンドウイルカの出産例は数多く報告されていますが、そのうち長期飼育例(3年以上)は15.7%にすぎません。当館のアーサーの場合は406日という短い飼育日数ですが、アーサーの残した飼育記録は、これからのイルカの繁殖、長期飼育にとって貴重な資料となるでしょう。(伊藤達志)

催し物

なかよし水族館

今年のなかよし水族館（動物愛護デー）は、生物とのふれあいを通じ動物愛護と生命の尊さを知ることテーマとし、9月22日から24日までの3日間開催されました。

催事の内容としては、午前と午後の2回、館内の施設見学、イルカと一緒に記念撮影、イルカや魚への給餌体験等を行い、参加したお客さまは大変喜んでいました。

また、これに先立ち日本動物園水族館協会が実施している動物愛護に関する標語募集を、7月中に当館でも行いました。73作品の応募があり、そ

の中から5作品を選んで提出したところ、青森市油川小学校2年生の寺島りゅう



うん君の作品が見事、銀賞を受賞し、23日当館において、表彰式を行いました。（成田）

受賞作品

『人がいて、動物がいて、魚も住んでみんなの地球』

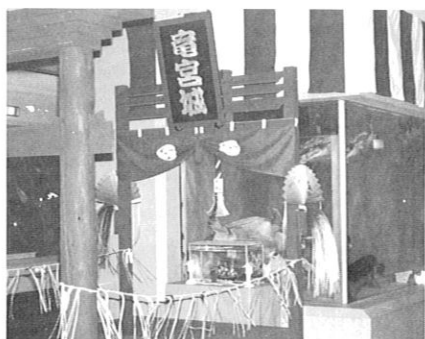
正月だよ大集合

毎年浅虫水族館では、元日から盛り沢山の内容で皆様をお迎えしていますが、今年もまた「正月だよ大集合」と題しまして、1月1日から6日までの期間、年の始めにふさわしい内容で皆様をお迎えすることができました。

館内に入ると、まず目に飛び込んでくるのが朱色に塗られた竜宮城のセットです。これは海ガメの展示水槽を竜宮城に見立てて、入館されたお客様にお参りをさせていただき、カメたちの長寿にあやかっていただければという趣向です。

またショーホールでは、元気な子供達が参加し

て新春餅つき大会が行われ、ショーホールいっぱい元気な子供達の「ヨイショ！」



の掛け声が響き渡り、お正月らしさを盛り上げてくれました。

来年のお正月も趣向を凝らして皆様をお迎えしたいと思います。（松山）

青森冬まつり

青森冬まつりは、1991年2月7日の前夜祭から11日まで開催されましたが、9日からは浅虫水族館も浅虫会場の一員として参加しました。これは地元浅虫温泉からの強い要望で実現した地元密着型の催事で、地域振興という観点から大変意義の深いことでした。

催事の内容としては、例年、水族館独自で催していた雪のスロープ遊び、ペンギンの屋外展示、アニメーションの上映の他に、浅虫温泉主導で、水族館駐車場を利用した人間馬力大会、そしてレクチャーホールにおいては、著名人の色紙と参加

旅館が所蔵している美術品等を展示したロビー展を開催しました。また2月10日を



「温泉の日」と定め、入館者及び人間馬力大会参加者に、浅虫温泉の無料利用券を配付しました。

これらの結果、入館者数も前年の同期と比べて増加し、利用者の方々にも好評でした。（横山）

～浅虫の海の生物たち～

(13) ホタテガイ

Patinopecten yessoensis

ホタテガイは、翼形目、イタヤガイ科に属している、冷水性の二枚貝です。その分布は、太平洋では関東以北、また日本海では能登半島以北となっており、主に水深10～30mの砂れき底に生息しています。

生活史は、むつ湾を例に上げますと、3月から4月にかけての水温が上がり始める頃に産卵が行われます。雌貝1個から産み出される卵の数はだいたい数千万から1億粒です。卵からフ化した幼生は、約40日の浮遊生活を経てから、海藻などに絹糸のような足糸を出して付着します。そして付着生活50日ほどで、1cm程度の稚貝になると足糸を自分で切り離して海底に落下し、以後、生活の場を海底に移します。底質は砂れき底を好みますが、これは砂の上にくぼみを作り下側の殻を埋没させて体を安定させるのに便利だからです。もし、



その場所の居心地が悪い場合には、他へ移動します。この移動する方法がちょっと変わっていて、2枚の殻を急激に閉じることによって海水が吹き出され、その反動で跳ね上がるのです。これはヒトデなどの外敵に襲われた時にも行われます。底棲生活に移ったホタテガイの生残率は、とても低いものですが、海水中の微細な植物プランクトンを餌としながら成長し、4年で15cmほどになります。

また、ホタテガイの外とう膜の縁には約70～90個もの小さな黒点状の眼が並んでいますが、これは明暗を感じる程度の物だそうです。(金沢 勝)

浅虫水族館日誌抄録

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|------------------------|
| 8. 2 | 六ヶ所村尾駈よりマンボウ搬入 | 10. 31 | マリンピア松島水族館よりメガネモチノウオ搬入 |
| 11 | 江の島水族館へマンボウ搬出 | 11. 2 | 白糠よりタカノハダイ搬入 |
| 18 | 白糠よりスルメイカ搬入 | 5 | 平館よりコショウダイ搬入 |
| 19 | 秋田県角館市 菅原氏よりカイヤン受贈 | 8 | 十和田湖水族館よりヒメマス他搬入 |
| 21 | 江の島水族館へマンボウ搬出 | 12 | 和歌山県立自然博物館よりウミシダ他搬入 |
| 9. 4 | 尻労よりスギ搬入 | 15 | 和歌山県立自然博物館へイシナギ搬出 |
| 9 | 仔バンドウイルカ“アーサー”死亡 | 22 | 和歌山県立自然博物館よりギンガメアジ他搬入 |
| 11 | 平内町よりオヤビッチャ搬入 | 12. 2 | マリンピア松島水族館よりスズキ搬入 |
| 14 | 土屋にて乗船採集、ブリ、マアジ他採集 | 13 | 海遊館よりチョウウオウオ他搬入 |
| 21 | マリンピア松島水族館よりサカサクラゲ、サンゴタツ搬入 | 14 | 海遊館へムラソイ、ドナルドソソ他搬出 |
| 10. 9 | 深浦町よりエビスダイ搬入 | 27 | 青森県栽培漁業公社よりヒラメ搬入 |
| 22 | 油壺マリンパークよりチョウチョウウオ他搬入 | 1991 | |
| 23 | 油壺マリンパークへイシナギ、オオカミウオ他搬出 | 1. 21 | 平館よりカゴカキダイ搬入 |
| 25 | 平館よりイトヒキアジ他搬入 | 24 | 泊よりクロアナゴ搬入 |

動物紳士録



ワモンアザラシ

Phoca hispida

アザラシ科の中では小型の種類に属し、北氷洋全域・オホーツク海、ベーリング海などに広く分布しています。体には白色の縁どりをした輪の模様が散在しています。現在、当館で飼育している個体は、1990年8月22日に青森県の下北半島の津軽海峡に面した海岸で保護されたもので、生後5ヶ月位のオスで体長82cm、体重が8kgでした。保護された当初は頭部に多少の傷がありましたが、現在ではそれも完治しました。毎日、餌のイカナゴを1.2kg程摂餌し、ゴマフアザラシと共に元気いっぱいプールを泳ぎ回っています。

ハマクマノミ

Amphiprion frenatus

奄美大島以南の西部太平洋及びインド洋に分布し、珊瑚礁の浅い海でイソギンチャクと共生しています。赤褐色の体に白い帯が眼のうしろに1本ある美しい魚で、イソギンチャクにかくれることで外敵から身を守っています。岩の表面に付着卵を産みつけ雌雄で保護します。水槽内でもよく産卵し、親魚が一生懸命に卵を世話している姿を見ることができます。



エビスダイ

Ostichthys japonicus

南日本からマダガスカル・ハワイまで広く分布し、青森県の沿岸でも対馬暖流に乗って北上したものがまれに漁獲されることがあります。体は大きな厚い鱗で鎧ヨロイのように覆われていますが、夜行性のため日中は物陰に隠れようとします。水槽内の浅い窪みに身を寄せる姿は、額縁にはめ込まれた剥製標本を連想させます。また名前は鎧兜ヨロイカブトを着た姿を「蝦夷姿エビスガタ」と呼ぶことに由来しています。



表紙説明 メガネモチノウオ

通称「ナポレオンフィッシュ」と呼ばれ、成長すると全長2mに達するといわれています。

まさに「サンゴ礁の皇帝」と呼ぶにふさわしい威風堂々とした魚です。

詳しくは本文4ページを参照して下さい。

マリンスノー No.13

1991年3月発行

編集発行人

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-34 青森市浅虫字馬場山1の25

TEL 0177-52-3377